



# 『オフ製版初期の頃』

## (1) 初めての網ポジ作りに苦心

史談会開催日 不明  
(昭和46年3月：印刷新報掲載)

### ■ 語る人

鳥本 忠治氏  
(光陽写真平版社社長)

### ■ 【鳥本忠治氏の略歴】・

・明治25年生。滋賀県出身。明治41年日本製版合資会社入社。昭和12年に光陽写真平版社を創業、現在に至る。

明治41年、私が16才の時に日本製版合資会社に見習生として入りました。その当時支那から6人の年少生が官費で来ており、印刷、写真彫刻とか各部門に割り当てられていました。私も、当時写真製版があるわけではないので、始めは銅凸の仕事をやったわけです。

それから亜鉛凸版もやりましたが、その時にはアスファルトで焼いたわけですが、何時間もかかるわけです。普通ではインキの付着が何時間ももたないので、アスファルトで焼いたわけです。私を教えている小川さんという人が電胎部と彫刻部、製版部、写真それぞれの部長でしたのでわれわれが暇な時にそれを手伝わされた。その時の私の給料が日給で15銭でした。弁当を食べても17銭とられるので、靴も磨くし、色々の苦勞もありました。

この頃は、写真で銅板にとるか、彫刻で銅板に彫って小さくとり、それを石版に移して、みな色版をかけたわけです。銅版が浅い腐蝕ですから、ケツがつくといけないので、字間や絵の間の広い場所ではニスでとめておいて腐蝕の浅いのを補ったわけです。そして後でニスだけを削って取るわけです。

こうした仕事が主にあり、私は写真の技士として、現在の凸版とやっていることが変わらなかった。

ところが、大正になってから職業学校が出来まして、山本弥三郎先生が製版会社の顧問にきて、製版のこと写真のことに関することはここで大方向学んだわけです。

会社はそれまではタバコの印刷が多くて、レットルとか箱だとかをやっていたのですが、官営になったために仕事が少なくなった。そしてちょうど、美術印刷に移り変わるという時でした。ですから、

写真のほうは暇になってしまったので、電胎の中島徳太郎という人の所が写真製版をやっていたので、そこへ託されて行ったわけです。その人は頭の進んだ人でしたから色々なためになることをわれわれは教えてもらいました。製版会社がまた写真を始めるからというのでそこを出て会社に帰ったわけです。

そうしてやっている時分に、高等工業を出た一里山金助さんという人が、私の会社に入ってきて一緒にやりました。また、芝一雄さんという、実業練習生としてウィーンやドイツへ行き、大戦の時に逃げてイギリスへ行った人ですが、帰ってきて製版会社に入ってきたわけです。その時に初めて、いろいろの色版を作る研究をし、また芝一雄さんが散粉グラビアをやったので、そうしたのもやったり、写真の3色取り分けの機械をこしらえたり、幻灯式の設備を作ってやるやり方などもやりました。こうした研究を初めてやった時は、エマルションを使って分解しタンクフィルターをこしらえさせ、それで分解したものです。機械の前のレンズに立てかけ、そして色版をとるのですが色版のとり方もいろいろありまして、直網掛けのもエマルションでやったわけです。

そうした手間をかけて、仕事の時に普通は平版やる場合には、写真の銅板にとって、それにインキを盛り、石版に伏せてこしらえるというようなことをまだやっておりました。

大分研究しているうちに、今の市田がHBを買ったという話が出たものですから、会社も放っておけん、ということで、大正7年ころ柴さんと今井治吉先生をアメリカにやり、色々調べてきたところが、HBにかなう機械がないということで帰ってきたわけです。その時に、向こうから色々の使う薬品、材料をもって帰ったのですが、それまでわれわれが見たものは中田熊次社長が向こうから取り寄せた品物をわれわれにみな見せてくれた。その時見たのが網ポジのネガで、長い網ポジで、これでどうしてやるのかと思いました。今思いますと向こうではその時すでに平凹版をやっていたのでしょう。

私たちが網ポジをやった時には、私たちが初めてですから、スリガラスに写真下引をやってやりましたが、アーランプをかけると膜がパラパラ剥れてしまう。これではどうしても上手くいかないのので、ゼラチンに変えたりして苦労したわけです。

それから焼き付けですが、焼き付けするのでも、向こうから買って来た現像インキを塗ってもどうにも上手くいかない。しょうがな



いから、部屋を閉め切っておいて、ローラーでインキを盛って、「洗い出し」というようなことをやり、そしてどうにか平版が出来るようになったのです。

そうしたことを色々やったが、その時にはまだポジを取った時にもメッキをしないでやったわけです。

また、ポジの修正をする時には、向こうで見てきたように、イカの甲を削ってそれを粉にして、乳状にしたもので濃いところを落とすのに使ったわけですが、薄いところはクレヨンやエンピツでやって、そうして修正してきたわけです。まだその時分には、今井先生というエライ人が写真の修正を一生懸命やっていたわけです。

## — 市田と合併への道 —

### (2) 初めて HB を本格的に行う

3色版をやるのにも、初めは、セパレーションしたものをPOPにやって、そしてガラスに貼って、濡れたままで寸法が変わらないようにして、網掛けをしてとっていただくくらいです。

また、あの時分は乾板が手元にちょっとなかったので普通の乾板を使ってピノクロムで染めてパンクロを使ったわけです。そしてマゼンタかけて使っておりました。

私が入った時は四ツ切の写真機械でした。芝さんが来て、色々大きな写真機械を作ってやったりしました。

そして、その時に40インチ100線のスクリーンも買って、アメリカへ行って買って来たアーク灯などを取り付けてやっていたという状態です。

その時分は、まだ大日本スクリーンなどでは出来なかったのですが、大事に大事にスクリーンを使っておりました。

こうした時に、朝日新聞が辻本のグラビアで刷って「グラフィック」を出すということが耳に入ったわけです。

そこで、うちの会社の重役たちが寄って「毎日新聞で何とかなら



んか、これではいかんから……」という話が出たわけです。われわれは実際にそれほど仕事をやったわけではないのですが、社長から「無理にでもやれ」と命令が出たわけです。

丁度、12月の25日頃からかかって、正月も休まず、元日の朝帰るといような苦勞をして、2日からまた仕事を始めて、そのようにして朝日の新年号と同時に出せるよう間に合わせたわけです。あの時は「MC・プロセス」という名前で出しましたが、大変受けが良かったわけです。

そんなわけで、泣かされてきたのは私たちのほうで、正月の元日にみな紋付袴で出入りに来るというのに、帰って2日の日にはまた仕事。それから、少しも帰らずに会社で寝泊りして仕事をやったわけです。そうしないと1週間、2週間では出せないわけです。それまでと違って、手間をかけなければ、そう簡単にハンコが出来なかったので、会社に泊った時にポジがとれたら「空の星が取れたよ」って、そう言ってポジをとって、ネガをとって、というふうにやっておりました。

今井先生が、正月の顔合わせに羽織を忘れて行った、というくらいにみな仕事に一生懸命でした。

今井治吉先生というのは、製版界では大先生で、あの時分は工場長や支配人より月給が上で、工場長が50円か60円なのに百円以上もとるのであります。

まあ、そうしてやっているうちに、私の会社と市田とが合併することになり、大正12、3年頃に私と一里山さんが一番先に市田のほうへ行って、荒木さんの代わりに一里山さんがコンポーザをやり、私が本庄君の代わりに写真機械のほうをやったわけです。こうして、まもなく交流が行われHBが大々的に行われたわけです。

それまでは、「HBの部屋には入ってはならん」ということでしたので、HBプロセスのことはわからなかったわけです。わからないで、ただ中田社長の命令でやっていたわけです。

そういうようなわけで、初めてHBにかかるようになったわけです。

HBをやる時に、菊全のポスターなどは原寸にとるんです。2尺何



寸、3尺何寸という大きなガラスで、ポジを1枚とるのに、なかなかとれないわけです。しかも、3枚も4枚もとって、初めて使ってもらえるという状態でした。それから、ネガをとるのに午前中に1枚とれたら良いほうでした。それほど厳しかった。

それから、それを「洗い出し」して溶化して仕上げをし、レタッチで、それをヨードで抜いたり、流したりするわけですが、それにやはり何時間もかかるわけです。

そのようなことをして、どうやらやっていたわけです。

## — 多色印刷への道 —

### (3) オフ刷りが当時の悲願

昭和12年頃に市田を辞めて、その頃ちょうど長谷川が凸版を出すようになっていたので、こんな商売をするのなら東京のほうがよからう、という話が出たわけです。

その前に、カキモトさんが菊半くらいの機械を、凸版会社の下請けの井上工廠で始めたわけです。

私が行ったら、菊全の塗料の機械と焼枠をこしらえてくれて、ホエラーもこしらえたわけです。菊全もみな金属で、ちょうど市田の機械をマネたようなものでした。

それから、1年ほど後にスクリーンを注文して買いましたが、1万円かかりました。戦争の関係で、その後は手に入らなくなり、私が注文したのが最後くらいでした。

そして商売を始めたわけです。

会社では凸版の仕事をやり、また、映画のポスターも始めの頃は大方私のところでやりました。

こんなこともありました。大蔵省のポスターを共同、凸版、大日本、東京印刷の4軒で、これを分けて刷るのですが、菊半と菊全と四裁の8色のポスターで、その8色の原稿をもらって僅かな期間で仕上げなければならなかった。そして、校正をするのも普通のやり方で



は間に合わなかった。

それから、戦争に入ってから、戦争映画もやられたわけです。そうしてどうやらこうやらやっていたんです。

## 【豆知識／ワンポイント解説／補足説明】

### ＊プロセス平版以前のこと＊

大正になって金属板が石版石に代わると、取り扱いはやうやく簡単になったが、製版法の点では明治時代と大した変わりは見られなかった。

その時代の製版は、まだほとんど手描きである。すなわち、肉眼で原稿の色彩を分解し、各色の版を描き分ける。どんな名人の石版画工でも、カメラのように3つの原色に分けることは出来ない。少なくとも、10色、15色時には20数色掛け合わせることもあった。35色刷り重ねたポスターさえある。

色を刷り重ねて中間色を出すためには、中間の諧調を思うままに表現することが必要である。それには砂目石版が最も適している。この多色砂目石版をクロモ石版と呼び、最も高級な製版印刷法とされ、額絵やポスターに利用された。

解き墨で描画製版する磨き石版でこの濃淡諧調を表現するには、点描法が用いられた。細い丸ペンに解き墨を含ませ、石の上に微細な点を一つひとつ打って行くのである。この恐るべき仕事を簡便にするために、石版用フィルムが考案された。厚いゼラチンの皮膜の片面に微細な突起を作り、枠に張ったもので、転写インキを塗布し、版面に押しつけて転写する。これは石田旭山の子石田敬三によって国産化された。



写真石版の技術は、金属版となったおかげで余程楽になった。感光液をひくのも、焼き付けも石版石版(東京写真製版社社長)簡単である。それまで活版や銅版から転写していた小さい文字なども、写真で正確に製版出来るようになり、写真類も単色のものは簡単に印刷出来た。(もちろんこの場合も、製版されたものは厚版で、それから転写して刷版を作った。刷版の直焼きが行われるようになったのは、遙か後のことである)

しかし、問題は3色版と同じような色のある原稿を平版で印刷することである。理論から言えば、分解ネガを作り、それぞれ平版に製版して3色インキで印刷すれば良い筈であるが、実際には上手く行かない。3色版では、製版に際していわゆる止め腐食を行い、思うような色調を出すことが出来るが、平版では、一度焼き付けたら修整は不可能である。3色版の初期にやったように、分解ネガやそれから焼き付けたポジの上で修整しなければならない。しかも、平版では表現出来る諧調が短いから、3色、あるいは墨版を加えた4色の他に、淡赤、淡藍など補助の版を加える必要があるので、一層面倒になる。

3色版と同じような方法で、大判の多色写真印刷を平版で行うということは、当時の日本の平版印刷関係者すべての悲願であった。

この写真応用多色オフセット印刷を軌道に乗せたのは、さきに中西虎之助と協力してオフセット合名会社を設立した、市田幸四郎である。

東京写真製版工業協同組合発行の

「写真製版工業史」より抜粋











